

正義の味方になりたかった復讐者

ドリーム

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第四次聖杯戦争にて、泥に飲み込まれそのまま大聖杯に囚われた少年■■■■。後の第五次聖杯戦争で聖杯が聖剣に破壊されると同時に脱出する。そして十年囚われていた少年は青年になった。十年の年月と共に空っぽになった青年は恩人との正義の味方としての旅をしていき抑止力と契約し、悲惨な最後を遂げる。

彼は正義の味方になりたかった。けど…その身はすでに復讐者だった。

目次

オリジナルサーヴァント設定表	1
第五次聖杯戦争〜終戦〜	4
グラウンドオーダー	7
記憶忘却	10
守護者	13
百万と1人の命	17
ルーラーとアヴェンジャーのジャンヌ・ダルク	20
あなたはあなたを保てますか？	24

オリジナルサーヴァント設定表

真名：無銘（アンリ・マユ）

クラス：アヴェンジャー

レア度：☆4

性別：男

身長・体重：178cm 57kg

属性・カテゴリー：混沌・善・人

苦手サーヴァント：アンリ・マユ（アヴェンジャー）、エミヤ（アーチャー）、エミヤ（アサシン）、天の衣（キャスター）アルトリア・ペンドラゴン（全員）

好感的サーヴァント：ジャンヌ・ダルク（ルーラー）、ジャンヌ・ダルク（オルタ）（アヴェンジャー）、巖窟王エドモン・ダンテス（アヴェンジャー）

筋力：D 魔力：B

耐久：C 幸運：E

敏捷：B 宝具：？

保有スキル：

心眼（偽）：A

記憶忘却：A++

戦闘続行：C―

この世すべての悪：E

クラススキル：

復讐者：A

抑止力：B―

対魔力：D

宝具（固有結界）：永遠の悪神^{アンリ・マユ・ゼロ}

ランク：C＋～A

種別：――

レンジ：――

内容：現実世界を自身の心のあり方で塗りつぶす禁忌の魔術『固有

結界』

正確には宝具ではないが、彼の英雄としてのシンボルなので一応宝具扱い。

見た目はどこまでも黒い泥の海が広がっていて空には青白い球体のようなものがあり、それを中心に黒い靄が広がっている。

そして黒い海には彼が心の奥底に閉じ込めた正義に対する復讐者としての怨念が佇んでいる。

生前：第四次聖杯戦争の時冬木の街に流れて来た泥を浴びて、泥が消えると同時に『この世すべての悪』と共に大聖杯に囚われてしまったただの少年。

後の第五次聖杯戦争で聖杯が破壊されると同時に『この世すべての悪』を取り込んだ状態で出てきたところを勝者であるセイバーのマスターに保護される。

聖杯の中でも成長は止まっておらず、出てきた時は17歳だった。後にセイバーのマスターと共に魔術使いとして世界中を正義の味方として旅するが、その道中抑止力と契約し、死後を売り渡す。そしてその最後は、数百万の命と自身の命を天秤に載せられ数百万の命のために友であり恩人であるセイバーのマスターに殺された…

聖杯に囚われる以前の記憶がなく、自身の名は忘れている。そのため友に名をもらったが、それすら忘れてしまった。

性格：何とも言えない人物。お怒らなければ、笑いもしない。スキル：記憶忘却のせいでマスターのことも最低限しか覚えられない。しかし聖杯について話をしようとする苦虫を噛み潰したような顔になる。というか逃げる。コミュニケーションができない。だけど味方サヴァントにはそれが誰でどんな人物かはわからないけど味方ということとは認識、記憶してらしく、ちゃんと守ったり敵対しないでいる。

あと天敵というか苦手なサヴァントが多い。

彼は自身を正義の味方になれなかった紛い物、根本が悪なのに正義を語った愚か者と称している。

…
本当の正義の味方なら、アヴェンジャーに何か当てはまらないのに
口では正義を唄っても、心が復讐心に駆られてては意味がない。常
にそう考えている。

生前の起源は『悪』。無自覚に取り込んだ『この世すべての悪』が原
因。

そのため、よく元凶のサーヴァント（アンリ・マユ）や、その元凶
に愛されたサーヴァント（エミヤ（アサシン））と鉢合わせになる。

何処かの赤い弓兵とは違って家事はできない。魔術も荒削りで、よ
く英霊の座まで到達できたと思う。

他クラスへの適性はギリギリアーチャーできるかできないか位。

聖杯への願いは正義の答え。

アヴェンジャーボイス

開始1「掃除だな」

開始2「正義は…負けてはいけない…何があってもな」

スキル1「これだな」

スキル2「ナイス判断だ」

コマンド1「ああ」

コマンド2「了解」

コマンド3「よし」

宝具カード「では…始めよう…」

アタック1「はあッ！」

アタック2「無駄だ」

アタック3「死に晒せ！」

エクストラアタック「正義…執行ッ！」

宝具「I am a pillar of the evil… I
do so it… anri・mayu・zeroッ!!」

第五次聖杯戦争〜終戦〜

『約束された勝利の剣』ツ!!』

「……暗い海でプカプカ浮いていた。いつからかは覚えていない……けどたぶんかなり前からだと思おう……」

「覚えているのは……『熱かった事』と……『息がでなかった事』……」

「そして……『たまらなく憎かった事』……」

「けど……今大きな光がこの暗い海を切り裂いてきた……」

「君が■■■だよな」

「気がついたら真っ白い部屋のベットにいた。」

「しばらくすると同じくらいの男が部屋に入ってきた。」

「赤毛で少し子供っぽい顔だけど……その表情は巨大な修羅場をくぐり抜けてきたような、なぜか何処か親近感のわく人だった。」

「いきなりで悪いんだけど……■■■は知らない俺の家にくると、施設に預けられるの……どっちがいい？」

「少し考えた。施設というのはよくわからないけどいまいち行こうとは思わない。だったら今日の前にいる男について行く方がいい。何と無くそう思った。」

「だから男を指差す。」

「すると男は凄惨な笑顔になりこっちに近づいてきた。」

「そうか……じゃあ準備しないと。君のために必要なものは買ってあげる。だからまずその病院服から着替えよう」

「とても手際がいい。きつとすぐく器用な人間何だろうなと思った。」

「あ、大事な事言ってなかったな」

「思えばこの言葉は彼にとつての再開であり、■■■にとつての始まりだったのかもしれない」

「俺は衛宮士郎。その…変だと思うけど…『正義の味方魔法使い』なんだ」

これは…

「どうしてすべての人を救えないんだッ…」

■■■■が『衛宮』となり

「ああ、それで誰も泣かずに済むのなら…喜んで俺の死後売り渡すよ…」

『正義の味方』に憧れ…

「私は士郎の正義を笑わないし…美しいと思う…」

『アヴエンジャー復讐者』に堕ちて行く…

「I am the bone of my sword…」

無限の剣と共に正義を貫き

「Steel is my body, and fire is my blood」

その果てに壊れた自分自身がいても

「I have created over a thousand blades」

どんなに

「Unknown to Death」

どんなに…

「Nor know to Life」

どんなに…

「Have withstood pain to create many w」

…どんなにその身に剣が、悪が…

「Yet, those hands will never hold any」

突き刺さろうと…

「So as I pray "unlimited blade works"」

その身は正義の味方であり続けた…

「I
a
m
a
p
i
l
l
a
r
o
f
t
h
e
e
v
i
l
」
この
身
は
た
だ
一
つ
の
悪
で
あ
る
…

よくある反英雄の物語…

グラウンドオーダー

I この身はたまたまの悪で
Have decided evil in my hand
Uncertain justice
There are ideas and realty
I never get the deal
The dark sea is my home town
だからこそ：
Yet：
I do so it,
”anri・may・zero”

カルデア英霊召喚室

約束された人類焼却を打破すべく、人類最後のマスター、藤丸立香はせつせとガチャに励んでいた。

「よし今日も召喚するぞー！」

『英霊召喚をガチャってルビるのやめようよ立香ちゃん…』

「でもドクターもガチャって思ってるんでしょ？」

『まあね』（即答）

そんな彼女に話しかけるのが不眠不休で働くツツコミにしてカルデアの癒し（かもしれない）ロマニ・アーキマン。通称ドクター・ロマン。

そしてもう一人…

「先輩もドクターも何の話をしてるんですか？私の宝具設置完了しました。いつでもいいですよ」

立香の後輩にしてエクストラクラス『シールド』のサーヴァント。

マシユ・キリエライト。真面目な彼女は立香とドクターが雑談してる間にさっさと準備を済ませていた。

『まあ、確かに早くした方がいいよ。何処かのサーヴァントが召喚されたサーヴァントを早く見たいからって食堂に監視カメラつなげちゃったからね。食堂にいるサーヴァントがみんなソワソワしてるよ』

「何それ初耳…まあだいたい検討はついてるけどね」

「ちなみに最近先輩が英霊を召喚するか礼装を召喚するかで賭博が行われたりしてるようです」

「見つけたら即種火周回だね」ニツコリ

「アツハイ」

「それじゃあガチャ行きまーす」

立香が召喚サークルに特殊媒体、『聖晶石』を三つ投げ込み、光の輪が三つ形成される。

「来た！三輪来た！しかも黄金に輝いてるぜ！大当たりだあツ!!」

「先輩落ち着いてください！けどやりましたね。それでクラスはなんですかドクター?…ドクター?」

返事をしないドクターに疑問を持ったマシユだが、その答えはすぐにはわかった。

『な、七つのクラスのどこにも当てはまらない…立香ちゃん！マシユ！エクストラクラスだツ!!しかもこの反応は…』

「Fooooooooooooooooツ!!」

「先輩!?フォウさんみたいになってます！それでドクター！クラスは一体…」

緊張が走る

『この霊基は…アウエンジャー復讐者だツ!!』

呼ばれている。

復讐心に堕ちた私を…

呼ばれている。

それははるか彼方焼却された未来から…

呼ばれている。

ならば答えよう…復讐者となった私正義の味方が…

応えよう…

まばゆい光が消えそこに現れたのは一人の男。

白い髪、浅黒い肌、黒いローブ、露出している右腕は肩から指先までかけて包帯を巻いている。何より目を引くのは光を写さない黒く濁った目。

「サーヴァント・アヴェンジャー。貴方の召喚に応じこの場に参上した。マスター、この身正義と武器悪は貴方の為…」

「よおおおこそいらつしやいましたあああッ!!カルデアはあなたを歓迎するよッ!!」

しかしどんな見た目をしてもこのマスターには全く無意味のようだ。全力で飛び込んできて抱きついてくる。

「…そのメガネの君。これはいつものことだったりする?」

「…はい。先輩はいつもこうです」

「…面白いな…」

復讐者は聖杯探索に参加する

記憶忘却

くカルデアく

「えーと…改めて自己紹介するね。私はマスターの藤丸立香。まだいろいろ未熟だけど人類最後のマスターを任されています。よろしくね、アヴェンジャー」

オレンジ色の髪の少女、藤丸立香はカルデアを歩きながら自己紹介をする。しかしそれに対しアヴェンジャーは申し訳なさそうに言った。

「き、記憶忘却…これまたずいぶん変わったスキルだね…しかもA+ 十って…」

管制室にいるドクターもこの反応だ。

それも当然。記憶忘却なんてスキル役立つか立たないかで言ったら限りなく役に立たない。

「故に私は…マスター、あなたのことは最低限しか覚えられない。だが安心して欲しい。貴方を傷つけることは絶対はない。断言する」「そっか…うん、覚えてもらえないのは少し残念だけどそこまで言われたら信じるしかないよね。ねえドクター？」

「うん、そうだね。サーヴァントを信じるも信じないもマスターである君の判断だ。ところで…」

ドクターはある疑問を口にする

「アヴェンジャーはどうやって戦うんだい？みたところ武器は持っていないようだけど…」

「包帯だ」(即答)

「…え？」

くカルデア戦闘シミュレーションルームく

『ならば見せてもらおうか：新アヴェンジャーの性能とやらをツ!!』
「どうしたのダ・ヴィンチちゃん！」

『一回言ってみたかったんだよね〜：よし。それじゃあアヴェンジャー君。君の相手はこの天才特製のエネミー達だ。立香ちゃんの指示に従ってマシユと協力して頑張って撃破してくれたまえ〜』

自他共に認める天才、それゆえになんでもありなサーヴァントと化した彼女（彼）はダ・ヴィンチちゃん。そう、有名なあの、レオナルド・ダ・ヴィンチである。

「…まあよくあるか…」

「いえ、そうそうありません。あ、あと私はシールドダーのデミ・サーヴァント、マシユ・キリエライトです」

「そうか：君も私のスキルのことは…？」

「はい：聞いています」

「なら話は早い：私は君のクラスと：自信はないが名前くらいしか覚えられない。だが、君が味方だという事は絶対に忘れない。もちろんマスターのことも：だから存分に頼ってくれ：私も君の盾を存分に頼る」

はつきりとした味方宣言。そしてこちらの盾を信頼するというアヴェンジャー。

シールドダー
マシユは嬉しそうに、応えるように…

「はい！マシユ・キリエライト、存分に貴方を頼りますツ!!」
宝具
盾をかまえた。

「行って！マシユ！アヴェンジャー！」

アヴェンジャー聖杯探索最初の戦いが始まる

くオマケく

「そういえば彼…レベルーじやないかな？」

「心配はいらないよロマニ。立香ちゃんがさつき種火渡してたから…」

「あれ？確か種火は在庫ゼロだったような…」

「戦闘前に立香ちゃんか賭博行為していたクーフリーンズを連れてきてマナプリにしてたよ」

「…でそのマナプリズムで種火あげたの？」

「うん」

いつも通りのカルデアだった

守護者

骨の敵エネミー、スケルトンが一斉にアヴェンジャーたちに向かってくるが…

「…っ」

まるでムチのようにアヴェンジャーの腕に巻かれた包帯がスケルトン達を拘束し、そのまま…

「…っはッ!!」

ほかのスケルトン達がいるところに叩きつけられる。

これだけでほとんどのスケルトンが消滅した。

しかしアヴェンジャーの攻撃は終わらない。縛り付けたスケルトン達から奪った剣を包帯の先端に巻きつけ残りのスケルトン達に突っ込んで行く。素早く、しかし一体一体確実に切り裂いて行く。

「戻ってアヴェンジャーッ!!」
「!」

後ろを向くと立香とマシユの後ろにもワラワラと湧いてきたスケルトン。しかし冷静に、慌てることなく包帯に巻きつけた剣を…

「シールドー!マスターを!」

「はい!」

投げつけた!

凄まじい速度で飛んできた武器はスケルトンの群れの中心に突き刺さり、包帯に引つ張られてアヴェンジャーも飛んできくる。

そして最後の一体になるまでスケルトン達は切り裂かれて行った。

「彼すごいトリッキーな戦闘方法だね…」

「そうだね…彼の真名がきになるよ」

ドクターとダ・ヴィンチちゃんのそんな会話が行われている間に戦

闘は終了し、三人が管制室に入ってくる。

「戦闘終了しました。ドクター」

「うん、見てたよ。にしてもアヴェンジャー。すごい戦闘方法だったね！」

「でしょでしょ!!私もマシユも最初から最後まですっごいハラハラしてましたよー!」

「はい!本当にすごい戦闘方法でした…」

そこでマシユはあることを思い出し、アヴェンジャーに尋ねる。

「そういえばアヴェンジャーさんの真名は何というのでしょうか?良かったら教えてくださいませんか?」

「そういえば聞いてなかった!」

しかしアヴェンジャーは首を横に降った。

「名前は…忘れた」

「え?」

「今のうちに言っておく。私はそもそも英霊ではない。守護者と言われる霊長の掃除屋だ」

「じゃあ、他のエクストラクラスのサーヴァント達を明日紹介するか
ら今日は休んでてね。ここが今日からあなたの部屋だから」

「ああ、頑張つて覚えようと思う」

しばらくすると立香はベットに座るアヴェンジャーの隣に移動し、
座った。

アヴェンジャーは首を傾げ、尋ねた。

「どうしたマスター。何か聞きたいことでもあるのか?」

「うん」

「アヴェンジャーは生前を何も覚えてないの？」

「ああ」

「辛くないの？」

「ああ」

「どうして…守護者になったの？」

「…」

立香はスカートの裾を握って話す。

「…カルデアにはね、レイシフトっていう時間移動の装置があつて、それを使って特異点を修復してるんだ」

「…」

「私はもともと魔術師じゃなくてたまたまレイシフトの資格があつただけの一般人だったんだ」

「けどいろいろあつて最後のマスターになって…アヴェンジャーと同じ守護者のサーヴァントと契約を結んだんだ。その時、守護者がどんなものか聞いた。ただひたすら人類の敵を掃除する『掃除屋』だつて…」

「今じゃなくていいんだ。でもいつか教えて欲しい。その時どんな気持ちだったか…」

立香は立ち上がりドアを開けて出て行こうとする、しかし…

「僕は…」

「！」

アヴェンジャーがくちを開いた

「なりたかつたんだよ…汚れない正義の味方に…」

「盗み聞きは悪いよ…エミヤ」

「…マスター、彼が新しいサーヴァントか？」

「うん、アヴェンジャー。エミヤと同じ守護者だよ」

「そうか…^{アヴェンジャー}復讐者か…」

アヴェンジャーのカルデアでの初日が終了した。

ね

そこは正義の果てに正義の味方 復讐者彼が悪神になった場所

その名も：

パチリと目が覚めた。

午前3：00。普段より明らかに早い時間に起きた。

今まで契約してきたあらゆるサーヴァントの記憶を見てきた立香。しかし今回ののは異質すぎた。再び顔をまくらにうずめ抱き寄せる。

そして静かに呟いた。

「固有結界『アンリ・マユ・ゼロ永遠の悪神』：」

I am a pillar of evil
 Have decided evil in my hand
 Uncertain justice is ideal
 There are enemies
 The darkness is my hometown
 Yet...
 I do so it, na zero
 "anri mayuzero"

悪夢の詩、彼を称え、彼を飲み込む死の詩^{呪い}：

殺せ殺せツ!! | | | | |

人々はいう

殺せ殺せツ!! | | | | |

悪は啜う

殺させてくれ | | | | |

正義は願う

ああ、それで誰もが死なずに済むのなら | | | | |
正義^{呪い}は受け入れた | | | | |

正義の味方を目指したことに決して後悔はない。
私に正義を執行した正義の味方[■]を僕は：

恨みたくない：

ルーラーとアヴェンジャーのジャンヌ・ダルク

クラス『アヴェンジャー』を確認…

宝具…

該当なし…

魔力…

正常に確認…

固有結界…

展開可能…

以上、霊基に異常は確認されない。

すべての機能が正常に稼働…

クラス『復讐者』^{アヴェンジャー}：真名『^{アンリ・マユ}■■■■』

起床します…

「また、掃除…ではなかったな」

アヴェンジャーのカルデアでの二日目スタートする…

「おはよう！アヴェンジャー」

「おはようございます、アヴェンジャーさん」

目の前の人物を検索…

一件該当…

マスター・藤…■立■…

再検索…

マスター・藤丸 立香を確認

隣の人物は…

検索…一件該当

シールドダー・マシユ・■リ■イト

再検索…

不明…

以降…シールドダーと呼称する…

「アヴェンジャー?」

「…おはようマスター、シールドダー」

相変わらず煩わしいな…このスキル記憶忘却は…

「約束した通り、今日は他のエクストラクラスの英霊を二人紹介するね。」

と言ってももはや見た目は双子みたいにそっくりだけど…(小声)
そんな約束をしたのか昨日の私は…

検索…一件該当…

…本当にしてみたみたいだ…というか今マスターが言ったのはどういう意味だ?双子?(聞こえてる)

「ここだよ…今開けるね」

マスターに連れてこられたのはある一室。

プシューという音を立てて開く扉。奥には、

「……(私のプリンを食べましたね……)」

「……(私のプリンを食べやがりましたね……)」

すごく…険悪な雰囲気を出す二人の少女がいた。

「えーと…紹介するね!白い方はジャンヌ・ダルクだよ」

「はい!はじめまして。ルーラーのジャンヌ・ダルクと言います、よろしくお願ひしますね」

「アヴェンジャー。よろしく頼む」

次に黒い服(?)を着た少女の方を向く。

「それでこっちの黒い方はジャンヌ・ダルク「オルタ」だよ」

「アヴェンジャー、ジャンヌ・オルタよ…」

「そうか、私もアヴェンジャーだ。よろしく頼…ん?…:すまない、白い方の君。もう一回名前を言ってくれないか?」

「ジャンヌ・ダルクです」

「じゃあ君は?」

「ジャンヌ・ダルク「オルタ」」

………

思考停止…

思考停止…

思考停止…

再起動…

思考開始…

……結論『理解不能』

「マスター、説明を求む」

「かくかくしかじか」

「まるまるうまうま…なるほど…側面か…:英霊召喚システムとやらもめんどくさいな」

「だよね、何度もダビデったり、Y A R I Oが出てきたり、挙げ句の果てにはワカメ、黒鍵、ライオン、バイク王、ワカメ、ルーン、弟子ゼロ号、ワカメ、ワカメ、ワカメワカメワカメワカメワカメワカメ:危うく私もリヨった側面が出てきそうだよH A H A H A H A H A」

「それ以上はいけませんマスター!」

「そうよ!それだけはやめなさい!」

リヨ:聞いたことがある。この世すべての英霊を片手で殺し、所長IIサンに何度もとぼちちりを浴びせ、ある一説では笑いながら

L A S B O S Sを片手でわしずかみし、「手ごわかった…:とつぶやく人類悪だとか…:

「回せ回せッ!!フハハハハハハ」

思考停止…

やむなし…

思考開始…

「ん?…終わったか?」

目を開けると、そこには荒い息遣いでボロボロの満身創痕な二人のジャンヌ・ダルクがいた。

「ど、どう…して手伝ってくれなかつたんですか…」

「そうよ…ちよつとは…手伝いなさいよ…」

「リヨ…恐ろしい存在だ。私では数秒も持たなかつただろう（思考放棄）」

「「そういう問題じゃありませんッ!!（ないわよッ!!）」」

息ピッタリじゃあないか

あなたはあなたを保てますか？

——熱い：

それは内側から燃やしていく炎だ。

——熱い：

臓器を焼き、骨を焦がし、肉は溶け、内側の炎は外に漏れだす。

——熱い：熱い：痛い：

目が溶け落ち、爪は塵となり、もはやそこにいるのは火だるまの黒炭人形。

——熱い：それでも：

右手を前に突き出す。

——崩れ落ちた。

ならばと、左腕を突き出す。

——これもまた崩れていった。

足も、体も、頭も、全てが塵となって砕けて、風に飲まれていった。それでも：

——心臓が生きてる。

律儀にコイツは痛みを伝えてきた。

もう神経なんてどうでもいいような体してるくせに。

送る血潮もない体で、コイツは律儀に震えるように動いている。

——なら、体が動かないのは不条理だ。

まだ動く。頭はもうどつか飛んでいったかと思っただが、歯と顎がまだ残っていた。

なら地面に食らいつく。

首をがむしやらの動かして前に突き進む。

——あるわけない瞳で前を睨む。

強烈な風が前から吹いている。風に煽られ、内側から漏れだす炎はより大きく、禍々しくともる。

黒く、黒く、黒く：

——熱い：痛い：

見えない前方をにらみ、悔しさからか、歯をギリギリと食いしぼる。

——そこに見える幻影に思わず動くのをやめた。

赤い外套を翻し、赤かった髪は少し白くなっていた。そして、彼は前を見ている。

彼は決してこちらを見ない。当然だ。彼にとって俺は、多勢を救うための少数の犠牲なのだから。

それに、彼は優しすぎる。

切り捨てた側の人間なんか見たら、彼は止まってしまう。

——なんでだ。

だから、彼は俺を見やしない。その足を前へ：

——なんでこつちを見てるんだ？

彼は体全体を振り向かせ、倒れ砕け散りそうな、今にも無くなつちやいそうな俺を見ていた。

——なんでそんな顔で見てやがるッ！

あんたが、正義の味方がそんな：

——誰かの犠牲になれたのなら良かった。

——あなたの夢の礎になれたのなら良かった。

——誰も泣かずに済む世界の為になら良かった。

——…何よりあなたに泣いて欲しくなかった。

「…殺させてくれ…???'」

「なんでそんな泣きそウナ顔で俺を見ルツツ!!!???'」
ウオオオオオオオオツツツツ!!!」
口

僕はそんな顔になって欲しくせ死んだわけじゃない。

熱い：熱い：熱い：

ああ、なるほど。

これが憎悪か。これが復讐心か。

契約それを受け入れることでナレるのならそうしよう。

俺は、正義の味方を引き立てる復讐者。

「——さあ、掃除だ」

さよなら、シ?ウ。さよなら：もう会うことはない。

仮に会うことができたとしても、そこにいるのは…

「……………ん……ここは……」

「あ、おはようアヴェンジャー！」

まぶたを開ける。すると目と鼻のすぐ先に綺麗な鏡のように世界を反射する大きな瞳があった。

「…綺麗だ」

「…ふえ!？」

「…いい目を持つてるな。マスター」

「え、ああ…うん」

俺はベンチから立ち上がり、マスターに向き直る。

「行こうマスター。周回だろう？俺でも覚えるさ」

「…え!? あーうん！行こう！マシユも待ってるし、他にも紹介したい人いるんだ！」

前をスタスタと歩いていく少女。彼女が俺のマスター。名前はまだ覚えられない。

でもそれでいい。彼女は後悔する。

俺と契約を交わしたことを。きつと…

俺は正義の敵なのだから。